

第4回（通算第23回）子育て講座（子育てについて聖書に聞く会）

2018. 11. 15 子供の家幼稚園

宗教主事 浦上結慈

「あなたがたも祈りで援助してください。」（Ⅱコリント1：11）

以下のことは実際に他のキリスト教保育を実践している幼稚園であったことです。『キリスト教保育』（2006年5月号）に載った文章です。「昨年、年中で入園してきたKくん。クラスの朝礼拝の中で、お休みのお友だちのことを覚えて、一人ひとり名前を挙げてお祈りすることに興味を持ったようです。入園以来一度も休んだことのないKくん。5月のある日の朝、母親に『今日は、ぼく休むからね』と言い出したそうです。母親が『どうしたの。園で何かあったの?』と尋ねても、『とにかく今日は休むんだ』ということで、その日は体調不良ということで休ませたそうです。次の日、Kくんは喜んで登園してきました。そして、自分のクラスに入るなり、友だちみんなに『ねえ、昨日ぼく休んだけど、ちゃんとぼくのためにお祈りしてくれた?』と尋ねていました。『うん、みんな、Kくんのためにお祈りしたよ』との返事に満足げなKくんの姿がそこにありました。『病気で休んでいる友のための祈りは、幼い子にとって特に深い意味があるのではないのでしょうか。今ここにいない、目に見えない友がおうちで苦しんでいる、淋しく思っていることを思い祈るのです。その友が再び元気になって登園してきたときのみんなの大きな喜び。休んだ子も、友だちが自分のために祈ってくれているということで、とても強められています。』（レギーネ・シントラの『希望へと育む～要約と解説』より抜粋）。

作者がKくんのことを『キリスト教保育』誌に紹介したのは、途中入園のKくんがズバリみごとにキリスト教保育の特徴を見つけたからでした。自分が覚えられていることでした。友だちから祈られていることでした。途中入園して来たKくんは、自分が果たして受け入れられているかどうか心配だったはずです。しかし、毎朝のお礼拝の中でお休みした友だちのために祈るその祈りを聞いて、本当にびっくりしたのです。祈りを通して友だちの名前が呼ばれ、覚えられている。自分が幼稚園にいる時は友だちから覚えられているのは当然です。けれども、幼稚園を休んでいても自分のことが忘れられていないのです。ちゃんと自分のことを覚えて祈ってくれている。これがKくんにとって新鮮な驚きでした。

こんな祈りが幼稚園を卒園して小学校に上がっていくと途端に忘れられてしまうことが残念でなりません。祈りの中でいつも覚えられていた友だち関係が、ぷつぷつと切れてしまうことに、他人を想う心の豊かささえも失われてしまうような喪失感を覚えます。

しかし、幼稚園時代に培ってきた祈りの精神は、やがて大人になってもどこかで息を息しているだろうと思っています。それが大人になって、何かふとしたきっかけで実際の生活の中に出て来るだろうと思っています。幼稚園時代に培った祈りを通して他人をいたわる思い、他人の痛み辛さが分かるということは、社会の中にある無理解と誤解等から生じる隔ての壁を壊していくための大切な要素となるでしょう。

もし、ご家庭で子どもたちが、たとえば食事の前の祈りをし、その中で友だちのことを祈ることがあった場合、どうかその祈りを大切に受け止めてあげてください。「友だちのことを祈るってすばらしいね」と言ってあげてください。そして、私たちも祈るものでありたいと思います。親はこどもたちから教えられることがけっこう多かったりします。

■上記の文章は、11月15日（木）開催の原稿です。有意義な一時を持つことができました。

■次回は2019年1月24日（木）午後1：00の予定です。